

A8) 大腸癌肺転移切除症例の検討

加藤 英雄・坂内 誠
神田 達夫・新国 恵也 (厚生連長岡中央)
吉川 時弘・佐々木公一 (総合病院外科)

【対象】1989年1月から1996年2月までの間に当科で手術を施行された大腸癌手術症例664例のうち肺転移に対して手術を受けた13例を対象とした。【結果】大腸癌原発巣の組織学的病期は stage I : 2例, stage II : 5例, stage IIIa : 3例, stage IIIb : 2例, stage IV : 1例であった。転移時期は、同時性は1例のみで、他の12例は異時性であり、異時性では原発巣手術後最短9カ月から最長4年6カ月であった。肺転移部位は全て一側性で、転移個数は、1個 : 3例, 2個10例であった。再切除症例は1例で同側の切除を行った。大きさは、直径1cm程度のものから5cm程度のものまでであり、縦隔リンパ節転移の廓清を行った4例中1例にリンパ節転移を認めた。術式は部分切除7例, 葉切除6例であった。

【予後】1) これら13例の累積3年生存率は84.6%であり比較的良好であった。肺切除後最長生存は4年8カ月であり、現在までのところ、無再発生存例は10例で、再発生存例は1例、死亡例は2例(1例は肺炎、1例は多発性肺転移)であった。2) 肺切除術の1年10カ月前及び2年7カ月前に肺転移に対して肝切除術が施行された2例は共に無再発生存中である。

A9) 内視鏡の早期肺癌に対する気管支腔内照射法の検討

三間 聡・宮尾 浩美 (県立がんセンター)
横山 晶・栗田 雄三 (新潟病院内科)
笹本 龍太・斎藤 真理 (同 放射線科)

目的：胸部X線無所見の内視鏡の早期肺癌に対する根治を目的とした非観血的治療法の確立。

対象と方法：組織学的に扁平上皮癌と確診された胸部X線無所見の内視鏡の早期肺癌を対象とした。放射線療法は、Linac X線による外照射40Gy/20回と¹⁹²Ir thin wireによる低線量率の腔内照射5Gy/回×5回を基準線量とした。経過観察は定期的な喀痰細胞診と気管支鏡検査で行った。

結果：1991年7月より1996年5月までに57例66病巣の治療を行った。症例は、全例男性、年齢中央値69才(52~80)、PSは全例良好であった。腫瘍径は1cmまでが49病巣(74%)と多数を占めていた。治療は計画通りの外照射40Gy、腔内照射25Gyが55病巣(83%)に

施行された。局所効果は全例CRで、これまでに7例(うち4例は腫瘍径2cm以上)が局所再発した。死亡例は6例(うち原病死2例)であった。治療を要する放射線肺炎が3例、無症状の気管支潰瘍が2例、grade 2以上の発熱が12例に認められた。

結論：本法は、安全性が高く、多発癌にも適応がある。10%に局所再発がみられ、腫瘍径2cm以下で腫瘍の末梢側辺縁の確認ができる症例を対象とする事が重要と考えられた。今後は、長期予後の観察が必要である。

II. 一般演題B「腫瘍マーカー」

B1) 口腔領域の悪性腫瘍患者における尿中6-hydroxymethylpterin (6-HMP) 測定 of 臨床的意義 (第2報)

小西 雅也・広安 一彦 (日本歯科大学)
桑原 徹・山口 晃 (新潟歯学部)
土川 幸三 (第一口腔外科)
戸谷 収二・高田 正則 (同 第二口腔外科)
渡辺 陽 (同 第二口腔外科)
柴崎 浩一 (同 内科)

目的：尿中6-hydroxymethylpterin (6-HMP) が悪性腫瘍の診断に有用であるか否かを口腔領域悪性腫瘍患者で検討を行った。

対象ならびに方法：対象は日本歯科大学新潟歯学部口腔外科を受診した悪性腫瘍患者55例を対象とした。方法は高速液体クロマトグラフィーにて尿を直接注入する測定法を用いた。検討項目：1. 組織型、2. 病期(stage)別、3. 他の腫瘍マーカーとの比較、4. 臨床的有用性。

結果：口腔領域悪性腫瘍患者における尿中6-HMPの組織型、病期別比較検討で有意差を認めなかった。6-HMP量と血清各腫瘍マーカー(SCC, CEA, IAP)の病期別陽性率の比較では尿中6-HMPが最も高値であり、各群間では有意の相関は認められなかった。

結語：6-HMP量は、治療経過を的確に反映し、予後判定の指標として有用であると考えられた。